

総持学園 Vision 2024

我逢人



総持辰三史



— 我人と逢うなり —



大本山總持寺 貫首
学校法人総持学園 学園主
江川辰三

総持学園は、関東大震災の翌年の大正13(1924)年に、曹洞宗大本山總持寺の御開山 瑩山禪師の600回大遠忌を記念して、光華女学校として発足しました。

当時の大本山總持寺は、これからの時代を見据えて石川県・能登半島から横浜・鶴見の地へと移転する一大事業を成し遂げ、いよいよお釈迦様から脈々と受け継がれてきた御教えを、社会からの要請に応える形で新たな世代へと伝えていく時期を迎えていました。総持学園は、まさにそれを具現化する事業として、創立されたのです。

さて、学園の母体である大本山總持寺では、去る平成27(2015)年に、お釈迦様から脈々と繋がれてきた正伝の仏法を御開山 瑩山禪師から受け継ぎ、その御教えを全国に広める礎を築かれた、本山二祖 峨山禪師の650回大遠忌が奉修されました。さらに、来る令和6(2024)年には、御開山 瑩山禪師の700回大遠忌という節目を迎えます。大本山總持寺は、この10年間にわたる両祖師の大遠忌テーマを「相承—大いなる足音が聞こえますか—」と定め、改めてその遺徳を学び受け継ぐとともに、次の時代へと伝えていく報恩の実践を掲げてきました。

令和6(2024)年は、御開山 瑩山禪師の600回大遠忌の記念事業として創立された総持学園にとっても、100周年という大きな節目を迎える年でもあります。先人たちの足音を受け継ぎ、教育を通じて未来を担う若者たちへと伝えてきた学園の歴史は、まさに「相承」の実践行そのものであり、創立爾来変わることのない指針でありましょう。

これから先も、教育を通じて多くの若者たちを育て、慈しみ溢れる温かい社会を実現していきたいと念じております。今後とも、皆様のお力添えをいただきますよう、謹んでお願い申し上げます。

建学の精神

だいがくえんじょう ほうおんぎょうじ
大覚円成 報恩行持



大本山總持寺 監院
学校法人総持学園 理事長
乙川暎元

今、世界には紛争や飢饉、気候変動やエネルギー問題など、地球規模の課題が山積されています。そして、国連はこうした課題に対してSDGs (Sustainable Development Goals) と呼ばれる開発目標を掲げ、各国の政府、企業、教育機関が一丸となって取り組んでいます。グローバル化が進む社会に生きる私たちにとっても、無関係だと目を背けることは許されません。

貧困に終止符を打ち、地球を保護し、すべての人が平和と豊かさを享受できる世界を目指す。その役割を担うのは、全てが繋がりが合って生かし生かされているという感謝と、その恩に報いるための実践ができる人財(材)です。そして、そのような人財(材)を育てることこそ、総持学園が掲げてきた、「大覚円成 報恩行持」という精神です。小さな女学校から始まった学園は、大正、昭和、平成と歴史を重ね、今や幼稚園から中学校・高等学校、短期大学、大学、大学院までを擁する総合学園へと発展を遂げてきました。しかし、感謝の心と報恩の実践は、変わることなく連綿と受け継がれてきた教育理念であり、令和の時代も変わることはありません。

一方、学園にとって身近な状況に目を向ければ、少子化による学生・生徒数の減少、経済成長の停滞による奨学金受給者の急増、サービスの多様化と複雑化、学修(習)者の主体的な学びを促す教育プログラム改革、ICT・IoTに対応する環境整備など、早急に対応しなければならない課題が溢れています。特に、大学を中心とするキャンパスの再整備は、今後の学園の在り方を大きく左右する一大事業と言えます。

鶴見の杜と呼ばれ、地域の人々の憩いの場、祈りの場として発展してきた大本山總持寺。その緑豊かな境内に抱かれる総持学園は、間もなく100周年を迎えます。今こそ、これまでの軌跡を見つめ直すとともに、次の100年をもしっかりと見据えて、成長を促す確かな教育と、誰もが心地よく学び集える環境によって、地域を、日本を、世界を支える志ある若者を育てるべく、「百尺竿頭進一步」の気概をもって、更なる精進に努めてまいります。

■ 鶴見大学

6 将来構想
Vision

8 教育について
Education

14 研究について
Research

18 医療について
Medical & Dental care

22 社会貢献について
Social contributions

26 大学運営について
University administration

35 主要計画一覧
List of main action plans

37 景観の移ろい
Changing landscape



■ 附属 中学校・高等学校

39 将来構想
Vision

43 改革計画概要
Outline of innovation plan

45 景観の移ろい
Changing landscape

■ 附属 三松幼稚園

47 将来構想
Vision

■ 総持学園

49 略年表
Chronology





小さくとも輝く大学

鶴見大学 将来構想

「小さくとも輝く大学」



学長 大山喬史

鶴見大学では、単年度の事業計画は勿論、俯瞰的視野に基づく中長期的なビジョンと、その実現に向けた計画を策定しなければなりません。今後の人口減少、殊に大学受験者数の急激な減少を鑑み、持続的な大学運営、社会に求められる大学としての使命を投影した大学運営の実現に向き合わなければならないからです。

本学は「小さくとも輝く大学」を目指して、教育研究の組織としての見直し、それを推進支援する事業組織の改革に向けても、叡智を絞って、その実現に向かって努力してゆかなければなりません。

今回のこの小冊子「総持学園 Vision 2024」は、あくまでも提言であり、方向性を示すものであります。今後継続的に見直し軌道修正を図りつつ、教職員、時には学生、同窓生が一丸となって、それぞれの叡智を結集し、大学のあるべき姿の実現、社会に求められる人材の養成に邁進してゆくつもりであります。

本学では、2016年度に短大部、2017年度には大学が、国が定める認証機関による評価を受審し、各学部学科の教育・研究・医療・社会貢献の評価がなされました。一部の項目で「改善」の指摘を受けましたが、それぞれ「適合」の評価を頂きました。この評価結果に応じていくことは社会が求める大学の使命であり、指摘された項目は「本学の喫緊課題」として真摯に受け止め、改善に取り組まなければなりません。

本学に入学する学生は、いずれ社会に巣立ってゆくキラリと輝く原石です。学生が能力を磨くも磨かざるも自己責任、「自律自助」だというのは容易いことですが、管子に「終身の計は人を樹うるに如くは莫し」とあるように、学生自身の「学びの意欲」を引き出す教職員の情熱こそが「人材」を育む上で必須なものと考えます。そうして学生自身が、教職員が、大学が、社会が納得する「人財」を編み出すことが出来るのでしょうか。

これが本学の建学の精神「大覚円成^{だいがくえんじょう} 報恩行持^{ほうおんぎょうじ}」と重なる鶴見大学の有りようだと思います。



将来構想においては、四つの役割・機能についてステークホルダーである学生、保護者、患者様、企業、地域社会、それに教職員の声にしっかり耳を傾けながら、「小さくとも輝く大学」の具現化に向けて実践躬行してゆかなければなりません。本学の建学の精神、即ち「禅」の精神に基づき社会に貢献する「人財」を育てることは、これからも変わりません。

しかし、最近の社会の変化は、高度化、複雑化の一途を辿っております。そうした中で、社会に求められる大学としての将来像をどう描くのか、その期待にどう応えられるのか、施策の断行と結果の明示を迫られております。

教育について *Education*

教育改革

使命・情熱・協働

本学の教育理念は、一つに学生のミッション（使命）を確立させ、二つにはその実践躬行のためのパッション（情熱）を燃え上がらせ、三つにはコラボレーション（協働）の達成感を啓発することにあります。

新しい社会を創出する人財

社会は、これまでにないほど斬新な若者の力を求めています。その力とは、知識・技術を基盤としながらも、主体性や自律性、多様性、独創性を併せ持つ総合的な力です。

- 「自ら考えることができる」
- 「自分の言葉で意見を表現できる」
- 「異なる考えを受け止めて吟味できる」
- 「問題解決に向けて協働できる」
- 「学んだことを実践できる」

これらの能力を身に付けた者こそ、どのような社会変容にも適応し得る人材であり、新しい社会を創出し、その発展に寄与できる「人財」となり得るものと考えます。

そして、そのような若者を育てることこそが、本学の教育の根基と言えるでしょう。

これからは、従来人間が行ってきた仕事もAI（人工知能）に取って代わられる時代です。しかも、日進月歩のテクノロジーによって、その領域は確実に広がっていくでしょう。そんな未来が迫ってくるからこそ、AIが持ち得ない、人間だからこそできる能力を身に付ける必要があります。

しかし、そうした力を伸ばすためには、ベースとなる豊かな語彙力、確かな計算力、魅力的な表現力、持続的な集中力、つまり「読み・書き・そろばん・聞く・話す」という基礎的な人間力が必要不可欠です。

誰かに自分の意見や考えを伝える際、豊かな語彙力、表現力がなければ文章は書けません。日本語力がなければ考えることすらできません。語彙が乏しければ浅はかな文章となり、相手に納得してもらうことができません。説得力もなく、感動を与えることもできません。

「正しい日本語を自由に駆使できる」という当たり前を確実に。

だからこそ、人間力を磨くための教養教育を大切にします。

高校から大学への円滑な接続

入学してから、高校までの学びと大学の学びとの違いにつまずくことがないように、入学前準備教育プログラムを構築しなければなりません。これにより、学生は高校までの学びを整理し、自分は何を目指すのか、そのためにどのように学ぶのか、大学生活の目的と意欲を明確化します。

大学での学びは、一人ひとりの興味・関心に合わせて多種多様です。だからこそ、大学生活が本格的にスタートする前に、学生自身が主体的な学びの姿勢に目覚める必要があります。

既に、一部の学科では入学予定者を対象に、自己探求を通じて学びの目的を明確にするプログラムや、語学領域を対象とした「リメディアル教育」を実施しており、今後はその有効性を検証しながら全学規模へとプログラムを拡大・充実させます。

また、教育の質と学修効果を高めるためには、適正な定員の設定と管理が欠かせません。我が国の若年層の人口推計や社会変革の趨勢を見定め、ステークホルダーの声に耳を傾けながら、不断の見直しを続けます。

学生の自律的、自主的成長

「教えるのは教員、教わるのは学生」という二項対立では不十分です。頑張っている学生自身が、講義や実習に「スチューデント・アシスタント」「ティーチング・アシスタント」「ピア・サポーター」として参画することで、学生同士の対話や切磋琢磨が生まれ、自律的、自主的な成長が促されます。教員の指導があるとはいえ、それは間接的であり、主役はあくまでも学生です。正に「自律自助」を育むのです。

こうした学生主体の活動を通じて、コミュニケーション能力や協働力を伸ばし、自らを振り返る謙虚な心、他者を認め受け入れる精神とともに自己肯定感を育みます。

例えば、スチューデント・アシスタントの事前研修では、教えるのではなく、何が求められているか、そのために何をどうすればよいか、自ら、そして共に考えることをファシリテートすることで、自律性や協働力を伸ばします。一年後の事後研修（振り返りミーティング）では、達成されたことや今後の課題を探り、次の代の学生に引き継ぐことで、責任感を醸成します。

学びのモチベーションを引き出す

「歯学部」「歯科衛生科」「保育科」は、それぞれの領域で活躍するエキスパートの養成という明確なゴールがあります。だからこそ、豊富な専門知識と高度な技能を獲得するため、理論（講義）と実践（実習）をバランス良く用意しています。

それは「文学部」も同じです。学生自身による主体的な学び（アクティブ・ラーニング）を軸に、学科独自の専門教育、地元企業やOB・OGと連携した授業、将来のキャリアデザインを見つめるきっかけとなるインターンシップなど、様々な体験が待っています。

こうした知識と体験のサイクルが、成長を促し、学ぶモチベーションを引き出します。

何をするか？ どれだけ成長できるか？

それは学生のやる気次第。そして、やる気を引き出し、支援するのが教職員、大学の役割です。教職員は、ティーチング（知識と技術を伝える）から、コーチング（知識と技術をどう活かすのか気付かせる）にシフトする必要があります。

仏教で「応病与薬^{おうびょうよやく}」という言葉があります。これは医師が患者様の病気に応じて薬を与えることを意味しますが、実は仏が法を説くに当たっては、教えを受ける人の性格、適正、能力、要求などに応じて投薬することに喩えた言葉です。まさに、医療人が患者様の全人格に寄り添って、治療に当たる姿勢、心得、そのものではありませんが、実は、本学すべての学部、学科においても、学生に教授する姿勢、心得にも共通する喩えではないでしょうか。

学生は、様々な文化、ご家庭、地域、社会、時々の時代の潮流を背負って育ってきております。その多くは、今の教職員の背景にあるものとは異なるでしょう。従って、このことをしっかり心に留め、教壇に立たなければなりません。



学修成果の可視化と活用

「何を学び、何を身に付け、何が出来るようになったのか？」

学生自身が、学修成果をきちんと自覚することができれば、達成感も湧き、次の学びにも繋がっていきます。

例えば、キャリア教育の一環として行われるインターンシップでは、学生は企業活動に対する理解の深化と同時に、自分自身の長所や可能性、課題への気付きを得ます。報告会では、それらを自ら振り返り、仲間と共有して課題解決をチームで考えます。こうした経験は、学生の自信にも繋がり、他の取り組み姿勢（授業や課外活動など）にも影響を与えます。

このように、一人ひとりの可能性を伸ばしながら課題を解決する力を育てるためには、教員と学生支援スタッフが連携したコーチングが必要不可欠です。

今、日本の教育界は、「何を教えるか？」という教員視点の教育から、「何を身に付けられたのか？」という学修者視点の教育へと大きな転換期を迎えています。

社会からも、学生が「どのようなこと」を「どれほどの水準」で学び、身に付けたのか、その客観的な学修成果の可視化が求められています。

こうした教育の質を大学として保証するためには、授業ごとの達成すべき目標水準や評価の指標を明確にし、学生と共有する方策を確立しなければなりません。

「鶴見の卒業生は使える！」と期待され、それに応える若者を育てる。「卒業生」「今日の学生」「明日の学生」それぞれにとって誇りに思える大学を目指し、成績分布や授業評価アンケート、学生生活アンケートなど、あらゆるデータを多面的に分析しながら、エビデンスに基づく教育改革を断行します。



学生支援強化

安心できる拠り所の整備

授業だけが大学生活ではありません。友人・先輩・後輩との交流、サークル活動やボランティア活動、将来のキャリア形成から心身の健康に関することまで、困ったり悩んだりした時には、即座に相談できる教員や頼れるスタッフがいます。本学は、キャンパス内に病院を有するだけでなく、日常的に学生の健康を管理する保健センターに専門スタッフを配置することで、健やかな大学生活を送ることができるよう配慮しています。

学生の不安や悩み事を解消するために、学生支援やキャリア支援を担当する副学長のもと、有資格者を中心とするスタッフを配置し、学生一人ひとりに寄り添うサポートを目指しています。近年は、高校までに培われた価値観や文化の違い、障がいの有無をはじめ、入学してくる学生の多様化が急速に進んでおり、その対応として、学修面では担任教員が、そして更に心理的・精神的なサポートの必要性を認識し、2020年度からは臨床心理士などの専門スタッフを拡充し、カウンセリングによるメンタルケアも含めた学生支援体制の強化を図るなど、学生にとって安心できる拠り所を早急に整備していきます。

また、本学ではオフィスアワー（学生が自由に教員の研究室を訪問し、相談や質問をすることができる時間）を運用してきましたが、今後はその活用状況や内容の検証を行っていきます。

「学生は何に興味を持っているのか?」「何に疑問を抱き、悩んでいるのか?」

オフィスアワーや学生面談の実態を把握することで、学生の自律自助を促す学生支援を実現します。

意欲ある学生の成長を促す奨学金制度

「頑張って大学で学びたい、成長したい!」

そんな学生の未来を開くために、役立つ幅広い奨学金メニューを揃えます。

本学では、入学時だけでなく、大学での学びを通して夢や目標に向かって努力を続ける学生を応援し、より一層の成長を促すための奨学金制度を拡充していきます。

さらに、経済的な理由による中途退学を無くすために、国の「高等教育の修学支援新制度」（本学は対象機関としての要件を満たしています。）と併せて、学内の各種奨学金との整合性を図るよう検討していきます。

研究について

Research

研究業績の評価・顕彰と研究費の適正化

鶴見大学では、毎年全ての教員に研究計画の作成と実績の報告を義務付けています。また、毎年2回に渡り、外部資金獲得に向けた研修会を実施するなど、国が交付する科学研究費への申請を奨励し、サポートや継続的な指導を行うことで、社会から認められる質の高い研究を促進しています。

今後は、科学研究費補助金等の競争的研究資金の申請状況、学会・学術誌における成果公表等の実績に配慮した学内研究費の配分を検討するなど、研究者自身の研究活動に対する積極的発意やインセンティブに配慮した研究費配分の仕組みに切り替えます。

研究資金獲得のための支援チームの設置

科学研究費補助金等の競争的研究資金申請において、申請書・研究計画書の作成や業績の効果的アピール法などを大学として積極的に支援する体制を整備することにより、大学全体の競争的研究資金獲得状況の改善と、それに基づいた社会貢献の向上を図ります。

また、この支援体制の具体的整備として、研究分野が大きく異なる学部、学科を有する本学の特徴に対応できるURA (University Research Administrator) などの専門人材による支援チームを設置します。

他大学・研究機関・企業との連携の推進

現在、多くの科学分野において、様々な知識、知見、情報を結集した学際的研究が行われ、その成果が社会に還元されています。本学は、文学部、歯学部ならびに短大の保育科、歯科衛生科からなるコンパクトな大学であり、この特徴を最大限に活かしつつ、さらに外部の大学、研究機関あるいは企業などとの共同研究を積極的に推進できる環境整備を整えていきます。

仏教文化研究所の機能強化

世界的な禅の根本道場である大本山總持寺の緑豊かな境内にあり、その教えを建学の精神として設立された本学は、仏教文化を幅広く研究する「仏教文化研究所」を1995年に設立し、積極的に活動を続けてきました。設立から25年を経た現在、本研究所は学園創立100周年に向け、文献学的研究を中心とした従来の枠組みに加え、本学ならではの仏教主義教育の実践に関する研究などにも着手すべく、機能強化に取り組んでいます。

変化の激しい時代だからこそ、どのような社会変容にも適応し自らの志を成就させ、社会に貢献し得る精神的柔軟性を持った若者を育てたい。グローバル化が進む世界だからこそ、私たちの価値観の根底に息づく仏教、禅の精神を自覚し実践的に活用できる若者を育てたい。そのために、本研究所では、学園の教育活動にも積極的に関わり、若者に禅の精神とその文化を如何に引き継いでいくべきかという課題についても研究を深めていきたいと考えています。全学必修科目である宗教学の教授方法や宗教行事の教育的意義付け、さらには禅の実践的提案に至るまで、本学だからこそできる宗教的情操教育に関する研究に領域を拡大し推進していきます。



過去に開催された公開シンポジウムのポスターより

社会ニーズに応える先制医療研究センター

これまで、先制医療研究センターでは産・官・学連携を基盤として、社会からのニーズを的確に捉えて、終末期医療における緩和ケア、法医学を基礎とした死因究明及び医療安全等に関連する研究等を行ってきました。

なかでも、2014年からは終末期医療におけるグリーフケアの実践者養成を目指し、大本山總持寺の修行僧に対する研修プログラムの開発と実施を試みてきました。

これは、宗教者としての経験をいかして苦悩や悲嘆を抱える方々に寄り添うグリーフケアの専門家を養成するために、東日本大震災を契機として東北大学でスタートした「臨床宗教師養成講座」が源流となっています。本研究センターの研修プログラムは、グリーフケアに関する基礎的な内容ではあるものの、次代を担う若い修行僧に、宗教者の新たな可能性の一つを提示することができたのではないかと考えます。

また、同じく東日本大震災の発災や犯罪見逃し死の社会問題化を契機とした身元確認や死因究明に関する社会的ニーズの向上、及び医療事故の防止に関する政策の強化から、本研究センターでは、法医学等の知見に基づく地域の防犯、防災、医療安全への貢献を考究してきました。具体的には、2014年には横浜市歯科医師会と、2016年には神奈川県歯科医師会と包括連携協定を締結するなどし、死因究明制度（死因・身元調査法）及び医療事故調査制度（医療法）に対応する体制を整えました。加えて、2017年には横浜市と災害時の支援に関する協定を締結し、防災・減災に関する連携を執っています。また、これらの進展を図るため、文科省からの助成に基づき、歯科診療情報に基づく迅速な身元確認を可能とするシステム、加えて、死後画像診断に寄与するオートプシーイメージ・センターの両システムを構築いたしました。

なお、最近となっては死因究明等推進基本法（厚労省等）の施行を受けて、神奈川県が所管する死因究明機関としての役割を得たことから、前述の両システムの実践運用を開始し、更に、警察歯科医の育成、鶴見区災害対策医療体制への参加等を行っています。

このように、本研究センターは、地域における医療、福祉、防災、防犯などの多くの社会ニーズに応える活動を推進しており、また、その内容の集中化が進んできたことから、これまでの実績に鑑み、今後は名称を「公共医科学研究センター」へ改め、更なる地域や行政との連携強化を図ります。



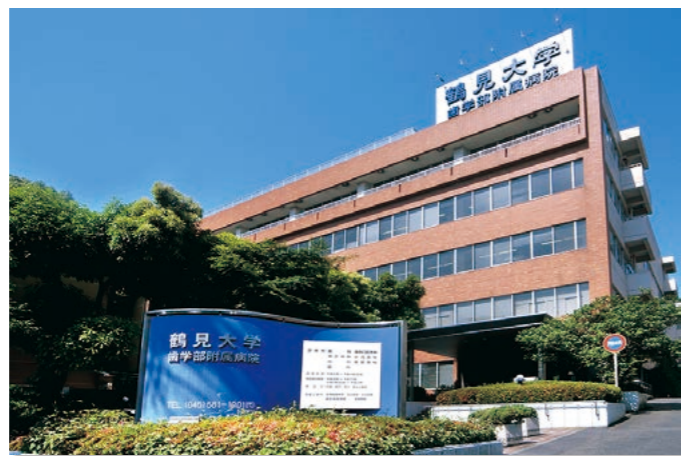
医療について *Medical & Dental care*

医療系大学としての使命

歯学部並びに歯科衛生科を有する本学は、充実した診療参加型臨床実習によって、知識だけに偏らない実践的な医療人の養成を担ってきました。その臨床実習のフィールドが、キャンパス内に設置された開放型の歯科総合病院である本学附属病院です。JR鶴見駅や京急鶴見駅からも至近にありながら、大本山總持寺の豊かな森に抱かれた医療環境は、移ろう四季を身近に感じる癒しの空間と呼べるでしょう。

本学附属病院は、歯科総合病院の名に相応しく、一般的な歯科診療のみならず、歯並びや顎の歪みの矯正治療に加えて、顎顔面の骨折や口腔がんの治療に至るまで、歯科・口腔外科全域を網羅する診療機能を備えています。また、デンタルインプラント治療や歯のホワイトニングなど時代のニーズに応じた診療にも対応しており、各診療科が高い専門性を発揮するとともに、必要に応じて複数診療科の有機的な連携を図っています。さらに、医科の診療部門として内科と眼科も併設しています。

このように、本学附属病院は教育研究機関であると同時に、半世紀にわたって「患者様主体の治療を考える病院」を追求し、地域歯科医療の中心的役割を担ってきました。その役割はこれから先も変わりません。だからこそ、社会構造の変容に伴う医療ニーズの多様化・高度化を見据え、多角的な病院改革を推し進めます。



地域医療連携の強化による社会貢献

現在、国家政策として地域包括ケアシステムの構築が進められています。これは、各地域の医療施設等が行政も交えてネットワークを組み、地域の特性を活かしつつ、高齢化する住民の生活の安心・安全を担保する仕組みを構築することを目指すものです。そのなかで、本学附属病院が地域の諸施設と適切に連携しながら果たすべき役割は大きく、具体的には、地域医療連携室の設置と共に以下の3点に注力していきます。

1つ目は、済生会横浜市東部病院を始めとする総合病院や歯科医師会等と連携し、周術期口腔機能管理（口腔ケア）を要する患者様の受け入れ拡大です。これは、地域住民の健康寿命延伸に大きく貢献できる歯科診療部門の柱として、可及的速やかに対応する必要があります。なお、地域全体の受け入れ状況は、その要請に全く追いついていないのが現状です。

2つ目は、歯科麻酔科による全身管理下での歯科治療を要する、主に障がいを抱える患者様を対象とした、日帰りでの全身麻酔下歯科治療の受け入れ体制の強化を進めます。この件に関する横浜市全体の実情としては、そのニーズに十分に込んでいるとは言い難く、本学附属病院に大きな期待が寄せられています。

最後に、訪問歯科診療システムの再構築による充実化です。これまで、特定の診療科で個別に対応していたものを、本学附属病院として、関連診療科が協働して運営できるようなシステムを構築し、場合によっては、訪問歯科診療の対象となる患者様に入院下での短期集中歯科治療を提供するような体制整備も検討の余地があると考えています。一般的に歯科診療は、外来通院という形態で行われますが、その受療率は70歳代半ばで激減するという実態があり、加齢に伴う口腔機能の低下（オーラルフレイル）により歯科治療を必要としながらも、通院が困難であったり、家族をはじめとする介護者の心理的・物理的な負担過多によって治療を諦めざるを得ない人が大勢います。このような方々のQOL（Quality of Life：人が人らしく生きるための生活の質）を保つためには、訪問歯科診療の体制強化が必須であります。



地域歯科医療の中核を担う新病院建設に向けて

現在、鶴見大学キャンパス再整備計画のなかに、新病院建設が組み込まれており、これまで現場スタッフの意見も取り入れながら議論を重ねてきました。その結果を踏まえ、患者様目線での利便性、効率の良い診療体制と医療情報の一元管理、先端歯科医療の提供、人材の適正配置と各部署間の有機的な連携、臨床と教育のシームレスな接続、を大きな指標として新病院建設計画を進めます。外観や現病院跡地については、大本山總持寺と協議しながら、緑豊かな境内の景観との調和をコンセプトに整備したいと考えています。

一方、新病院完成までの間は現病院を運用することになります。しかし、現状では病院建物の構造上の問題による非効率な診療体制（人員配置も含めて）が大きな課題となっています。これは、収益性という観点からも積極的に推進すべき前述の地域医療連携に主眼を置いた診療体制の拡充の障壁にもなっています。そこで現在、可能な範囲で現病院建物を改修し、関連各科の診療スペースや関連部署の作業スペースの共有化、ならびにそれに伴う人員配置の見直しを始めたところです。この事業は、現病院における課題の解決のみならず、新病院の運営シミュレーションも兼ねており、新病院の内部設計に反映することも目的としていますので、引き続き強力で推進します。



社会貢献について *Social contributions*

地域と共に発展する大学を目指して

これまでも、これからも、横浜・鶴見の街と共に。

多様化、グローバル化が進む時代だからこそ、自らの地域の歴史や文化、伝統の魅力をきちんと知り、それを広く社会に発信していくことが非常に大切です。だからこそ、地元の人々や行政と共に、横浜・鶴見の歴史や文化を継承し、未来に伝えていくことは、本学にとって重要な使命です。

本学は、鶴見のご本山として親しまれる大本山總持寺、地元鶴見の文化協会や歴史の会を始めとする地域の方々、そして包括連携協定を結ぶ横浜市鶴見区と連携し、文化・芸術から医療・福祉、防災に至るまで、地域を盛り上げ、地域の課題を解決し、共に発展する大学を目指します。



地元商店街との打ち水イベント
「地球を冷ませ in 豊岡」



東日本大震災復興「祈りの夕べ」



つるみ夢ひろば in 總持寺

地域の子育てサポート

本学の所在する横浜市鶴見区は、京浜工業地帯の中核都市として発展を続けてきました。

東京と横浜の中間に位置する交通の要衝であることから、臨海部の工業地帯、中心部の商業地帯、利便性の高い市街地、そして丘陵部の緑豊かな居住地と、様々な顔を併せ持つ都市と言えます。そのため、子育て世代の増加による待機児童問題や、外国籍家庭の増加による福祉の課題など、常に時代を象徴する社会的課題に直面しています。

そんな中、本学は開放型病院として長年にわたり地域医療の一端を担ってきた経験や、地域社会で活躍する保育者を育成してきた経験を持つからこそ、できることがあります。これまでに培ってきた医療、福祉、幼児教育の経験を複合的・有機的に活かして、地域の子育てをサポートするための病児保育施設や、地域開放型学内保育施設を開設します。

地域の子どもが安心できる居場所

身近なお兄さん・お姉さんが勉強を教えてくれるし、色んな相談にも乗ってくれる。
地域の子どもたちにとって安心して過ごせる居場所。

本学では、学生を中心としたボランティア活動として、横浜市鶴見区こども家庭支援課や生活支援課、地域振興課と連携した、学童保育や貧困家庭における子どものサポート、外国籍を持つ子どものサポートなど、地域の子どもの修学支援を行ってきました。

これは、社会貢献活動であると同時に、建学の精神に根差した実践的教育にも繋がります。修学支援を受ける児童だけではなく、支援を行う学生側にも多くの気付きを与える成長の機会になっています。

今後は、行政との連携を深めるだけでなく、教育支援を行っているNPO・NGOの協力も得ながら、建学の精神を象徴するサービスラーニングプログラム（社会活動を通して市民性を育む学習法）として発展させます。

社会ニーズと学内資源のマッチング

大学の教育・研究成果を社会に還元するために、1997年からスタートした「生涯学習セミナー」は、20年以上にわたって地域住民の学びの場、出会いの場として愛され、今では年間180講座（芸術文化系では「篆刻・刻字」「アルゼンチンタンゴ」、文学歴史系では「平家物語」「日本古代史」、語学系では「カンツォーネで学ぶイタリア語」「TOEIC講座」、宗教系では「瑩山^{けいざん}禅師の教えに学ぶ」など）を開設し、4000人以上が集う一大コミュニティにまで発展してきました。

しかし、成長期を経て成熟期を迎えた近年は、新規受講者数の減少や講座数の伸び悩みなどの問題に直面しており、生涯学習セミナーの在り方を抜本的に見直す必要があるでしょう。

また、本学が文部科学大臣委嘱事業として行っている「図書館司書・司書補講習」は、1954年の開講以来、多くの修了者を我が国の図書館界に輩出してきました。

しかし、昨今の司書・司書補は、その大半を非正規雇用が占めており、毎年司書資格を取得する人数に比べて、専任としての司書の募集が極めて少ないという現実もあり、本学においても受講者数が減少し続けていることが問題となっています。

一方、図書館利用の多様性が増しているなかで、重要な役割を担っているのが図書館司書・司書補であることを鑑みれば、本学が積極的に図書館司書・司書補の養成を推進してきたことに、大きな社会的意義があると言えます。



生涯学習セミナー
「アルゼンチンタンゴ」(左上)、
「篆刻・刻字」(右上)



地域社会のニーズも、時代の移り変わりとともに変化して行きます。

これからも、常に社会に向けてアンテナを張り、地域の人々が大学に何を求め、何を期待しているのかを知り、大学が保有する知識、技術、環境といったあらゆる資源を発信・提供・活用していくことが大切だと考えます。

大学運営について *University administration*

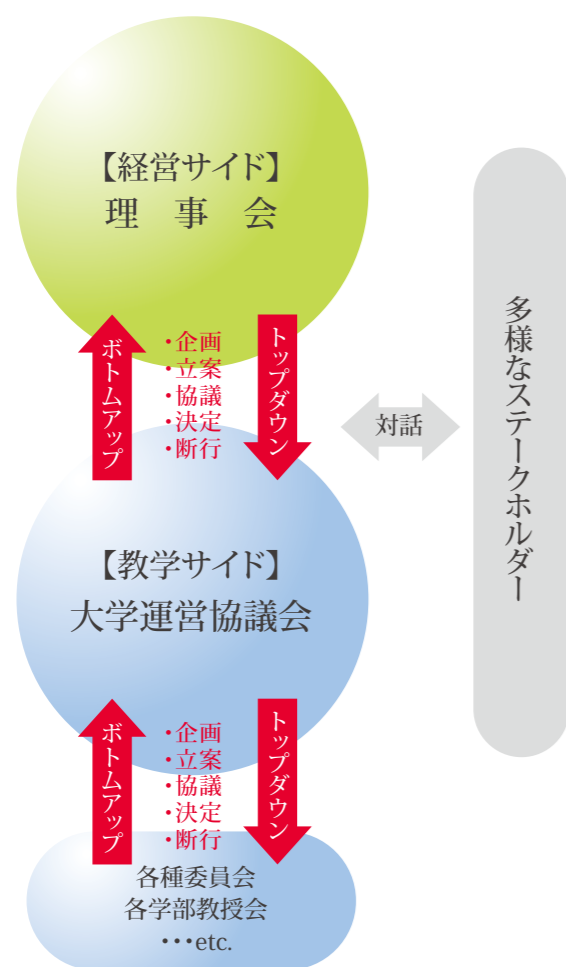
鶴見大学のガバナンス

大学の建学の精神、教育・研究・医療・社会貢献に関わるビジョンを現実化するには、大学のガバナンスを明示しなければなりません。

本学においては、経営サイドである「理事会」のもとに、教学サイドである「大学運営協議会」を一つの柱として、教職員（時に学生、保護者、卒業生など）が駆動力、言わばエンジンとなるのではないかと考えます。

「人」「金」「もの（施設・設備）」などの大学の資源の下に、教育・研究・医療・社会貢献などの実現がなされる場所に大学の使命があります。

教育の現場を考えると、それがアスファルトの道か、^{でいぬい}泥濘なのか、道なき道なのか、それによりアクセルを踏み、またブレーキを踏み、悪路を避けてハンドルを切る、これには教職員の智慧を仰ぐ必要があります。



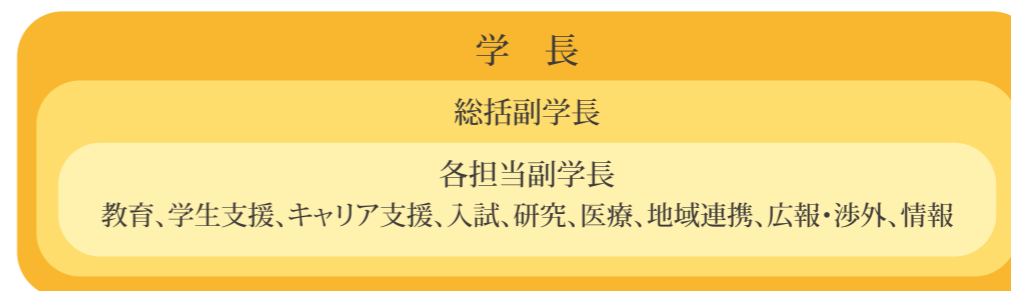
こうした情報を提供、対応案を捻出できるのは、現場の教職員ではないだろうか。これが、教学サイドの副学長、事務局の部長から構成される「大学運営協議会」です。

その対応案に、大学の資源を以って、どれほど、どのように対応できるのか判断するのが大学のトップ、「理事会」の役割でありましょう。

ということは、ボトムアップとトップダウンの双方向的議論が行われる必要があります。従って、大学のガバナンスを発揮するには、このボトムアップとトップダウンとの忌憚のない議論、意見交換が必須となります。そこで、2019年度から、左図のような構成で、大学運営協議会を発足させました。

なお、大学が行っている様々な活動の詳細までをトップが全て把握し、逐一判断を下すことはできません。そこで、先述のボトムアップとトップダウンの双方向的議論を促す施策として、2019年度から担当副学長制度を導入しました。それぞれの責任範囲を定め、現場で活躍している教員に権限移譲をすることで、全学を見渡す俯瞰的な視座と現場の実践が有機的に連動する任用体制の構築を目指しています。

具体的には、下図のとおり活動領域ごとに担当となる副学長を配置しました。



しかし、新体制の運用は緒に就いたばかりであり、制度設計に課題が残されていることも事実です。そのため、年度ごとにPDCAサイクルを繰り返すことで、社会からの期待に応え得るマネジメント体制を模索し続ける必要があります。

自己点検・評価活動の高度化

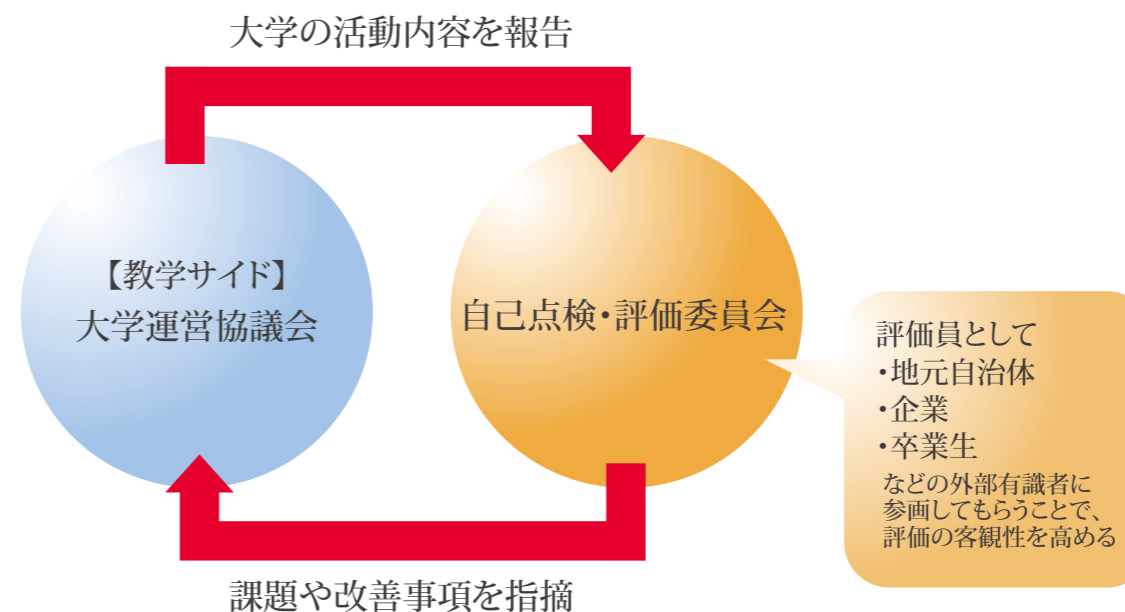
より良い大学を目指して、課題を洗い出し改善を促すために行う自己点検・評価活動は、これまで学内教職員のみで実施してきました。

しかし、時代の変化に対応するためには、外部の視点から鶴見大学を客観的に評価し、改善に繋げていく必要があります。

そこで、本学以外の大学教員、地元自治体、企業、卒業生などの外部有識者の力を借り、社会からの視点を加えることで点検・評価活動のレベルアップを図ります。

また、そのためにも大学が行う様々な活動内容（教育・研究・医療・社会貢献・大学運営）ごとに、数値目標を具体的に設定するなど、評価指標を可視化を進めます。

全ては、「卒業生」「今日の学生」「明日の学生」にとって、誇りある大学を目指します。



広報活動・情報発信の戦略的な取り組み

減少する18歳人口と大学数との不均衡の問題、これへの政策である大学定員の充足率に関する管理の厳格化、加えて、歯科医師国家試験合格率の厳格化による歯科医師数の制限的調整などは、いずれも本学が直面する大きな課題であります。これらの克服に向けては、本学が選ばれる大学としての魅力を効果的に発信することが求められ、即ち、本学の運営における重点事業として、広報活動の高度化を戦略的に取り組んでいく必要があります。

広報活動の本質は、広告物としての「認知性」に頼った訴求に留まらず、大学に潜在する価値や強みを発掘し、それらを言語化・可視化するプロセスを通じて教職員が自己の魅力を再認識することで、それらの魅力を多様なステークホルダーに伝える方略に繋がると考えます。

一方、受験生を取り巻く生活環境等の変化、とりわけ、ソーシャルメディアを中心とする情報通信社会への即応は急務であり、全ての広報形態の大胆な変容が求められています。

上記の点を踏まえ、中高校生、保護者、在学生、卒業生、地域、企業といったあらゆるステークホルダーに評価され、選ばれる大学となるため、広報業務を一元的に整齊した体制を構築し、広報素材の獲得、戦略的広報としての企画及び運用、広報予算の最適化などを実行し、本学における広報活動・情報発信の戦略化を図ります。

収支バランスの回復に向けた財政運営

本法人が将来に向けて永続的に発展していくには、健全な財務体質の維持と、安定した財政基盤の確立が求められます。しかし、大学を取り巻く環境変化のなかで、学生募集が一部難しくなっており、現状では経常収支のバランスが崩れつつあります。

今後は、財政運営の基本である「入るを量りて出ざるを制す」に立ち返り、収入確保について様々な工夫を重ねながら、支出についてもメリハリのある抑制を図りつつ、計画期間中に経常収支バランスの回復を目指します。

具体的には、収入が伸び悩む中で、全ての事業について費用対効果を勘案し、計画的な支出の抑制に努めます。既存業務についても見直しが必要であり、他校の事例を参考にアウトソーシングによる業務と経費執行の効率化を図ります。また、高額な物品調達については、各部門による分散的な調達から全学一元的な調達へと切り替え、併せて透明性を高めていきます。

教員組織の質向上

今、「何を教えるか？」という教員視点の教育から、「何を学び、身に付けることができるのか？」という学修者視点の教育へと、日本の大学は転換期を迎えています。

個々の教員の教育手法や研究を中心にシステムを構築する教育から脱却し、学修成果の可視化と併せて学生一人ひとりが自らの成長を自覚できるような教育に転換するためにも、教員一人ひとりの資質の向上と同時に、その集合体としての教員組織の質向上が必要不可欠です。

近年、教員の業務は多様化・複雑化の一途を辿っており、教育研究以外の活動に多くの時間と労力を割いていると言われていました。

教育研究の質を高め社会からの期待に応えていくためにも、今こそ教員の業務の在り方を見直し、その役割・機能に対応して評価・処遇の公平性・公正性を確保する必要があります。具体的には、基幹業務である教育と研究に加え、臨床や社会貢献、大学運営等の、実際に教員が担っている役割にもきちんと目を向け、その努力が報われるような仕組み（表彰制度・昇任人事など）を構築すべきと考えています。もちろん、教員一人ひとり、学部や職位、ライフステージに応じて重点を置く活動領域は異なりますが、基礎となる評価の視点や基準を明確化することで、透明性の高い活気ある教員組織の実現を目指します。

職員組織の質向上

大学として求める職員像、各部門や業務特性に応じて必要とされる知識・スキルなどを明確化することで、人材育成の方針を策定します。

その上で、一人ひとりの長期的なキャリア展望を見据えたジョブローテーションや、能力開発のための支援、研修企画の拡充などにより、個々人のレベルアップと部門間連携を図りながら、職員組織全体の質向上を目指します。

また、併せて目標マネジメントに基づく能力評価を処遇に反映させる人事制度改革を行い、人事の公平性・公正性を高め、働くモチベーションの維持・向上を図ります。

国際交流の活性化

本学の国際交流センターは、各学部・研究科と連携しながら、国際交流の発展を目指してきました。

今後は、同センターによる一元的なマネジメント体制の拡充を図りながら、既に本学のブランディングとして国際的に認知されている特質を一層強化し、積極的に発信していきます。特に、アジア圏を中心とした発展途上国からの期待は大きいものがあり、将来的には知識・技術の移転を目指します。

日本人学生の留学推進については、大学としての指導方針と現場教職員の熱意が大きな影響力を持ちます。興味を持つ学生が一定数存在する中で、それを汲み取り、実現させられる教職員の育成が急務です。

人類の歴史が続く限りイノベーション（技術革新）は不可欠であり、その第一歩は既存知と既存知の新たな組み合わせ、即ちダイバーシティ（多様性）との出会いです。これこそ国際交流の原点であると言えます。

だからこそ、国際交流を活性化するためには、ダイバーシティとの出会いをカリキュラムに組み込む必要があります。「日常で受け入れてこそ本物」という言葉があります。多様な国の価値観・文化と触れ合い、全地球規模の広い視野を持つ若者を育成していくために、国際交流に関する科目群の拡充を図り、柔軟な履修環境の実現を目指します。



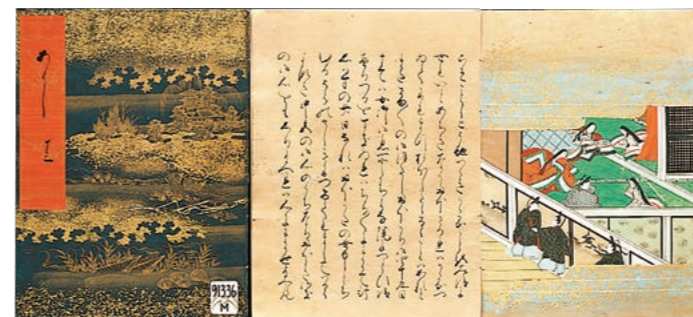
伝統と革新の図書館

本学の図書館は、84万冊の蔵書と1万冊以上の貴重書を所蔵する、全国有数の大学図書館です。全国大学図書館ランキングでは、毎年トップ10に数えられる（2019年は6位）、まさしく「図書館の鶴見」という異名に相応しい大学のシンボルとなっています。

そして、学生にとっての学修拠点、教職員にとっての学術情報拠点であることはもちろん、地元の高校生や住民への利用開放、横浜市内の小学校への学習支援活動など、地域における知の拠点としての役割も担っています。

ところで、近年は電子書籍やインターネットの普及に伴い、大学図書館の在り様も大きく変わろうとしています。本学に於いても、図書館の機能を「情報獲得」「考えを纏める」「交流・表現」の目的別にゾーニングするとともに、障がい者や地域住民も含め、多様な人々が利用しやすい環境へと、改革を進めています。

さらに、電子書籍やオープンアクセスジャーナルなど、近年急速に普及する様々な情報にも対応し、可動式の机・椅子を備えたラーニング commons の機能を発展させるなど、他者との交流や対話の中から生まれる「気づき」や「新たな知」の創出を促進する能動的な学修環境の構築を図ります。



『源氏物語』明石巻 紫式部著
奈良絵本 江戸時代前期写



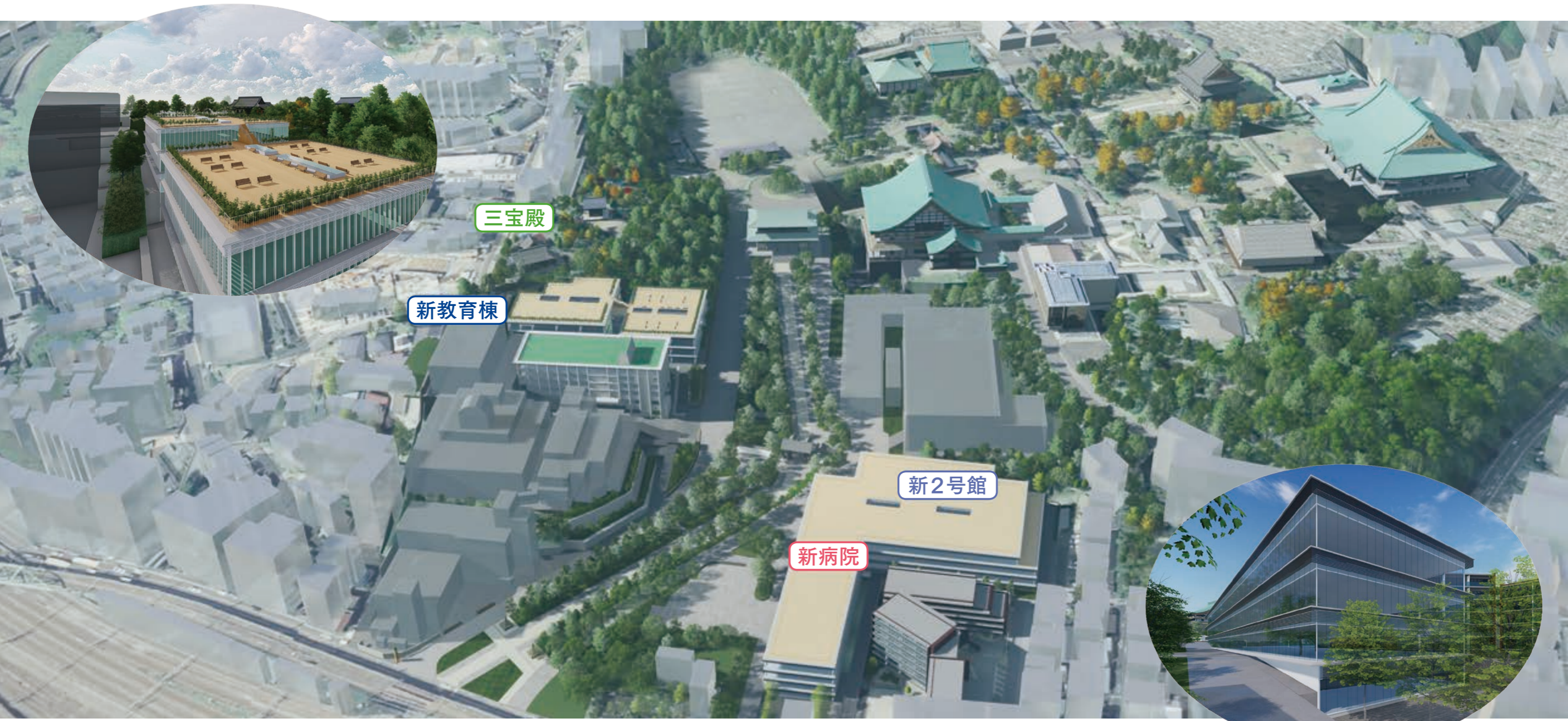
新たな時代に相応しいキャンパスの再構築

学生の成長を促し、社会が求める多様な能力を伸ばすためには、主体的な学び（アクティブ・ラーニング）に適した、ラーニング commons をはじめとする学修環境を整える必要があります。

また、授業以外の時間においても、友人・先輩・後輩・教職員との交流を通じて多様な価値観や新たな発見に刺激を受けたり、大本山總持寺の緑豊かな境内で自然や歴史を感じながら、知識や技術にとどまらない、全人的な人間教育を促す環境が不可欠です。

そのため、大本山總持寺の歴史と伝統を受け継ぎ未来に伝える境内の景観との調和、教育機能並びに学生動線の向上、バリアフリー化、省エネ化、防災機能強化など、これからの時代に相応しいキャンパスの再構築を、迅速に進めます。

さらに、建学以来、地域の医療・福祉・文化交流の拠点として、常に鶴見の街の人々と共に発展してきた本学の歴史を踏まえ、新病院の建設や病児保育所の開設など、多くのステークホルダーの声に耳を傾けながら、本学だからこそできる社会貢献の在り方を模索していきます。



※ CG 画像は、あくまでも検討段階のイメージです



Vision実現に向けた主要計画一覧 (2019~2024)

カテゴリ	成果	目標	計画
■ I. 教育			
■ 1. 高大接続の円滑化			
■ 入試判定基準の見直しによるAPの実質化(大学教育に相応しい学生の選抜)			
■ 入学者選抜における進学・学修意欲の確認			
■ 入試区分別の成績(GPA含む)推移・学修態度の検証			
■ AO、指定校等、推薦入試の妥当性についての検証			
■ 奨学金(入学金・授業料減免)による優秀者確保			
■ AO、推薦入学決定者の勉強習慣獲得と弱点克服(入口から中身への円滑移行)			
■ 体系的な入学前準備教育プログラムの構築(e-ラーニングを活用した事前課題及びスクーリングの開講)			
■ 本学の魅力を伝える外部アプローチ			
■ 附属高校への出前講義の実施			
■ 高校訪問・予備校訪問の継続・強化			
■ 2. 教育課程の改善(DPの質保証)			
■ 鶴見大学としての特色ある教育課程(カリキュラム)の実現			
■ 初年次の全学共通教養教育の設計・実施			
■ 授業時間や回数などの適正化、学年暦の見直し			
■ 歯学部: 歯科医師国家試験合格率の向上を目指したカリキュラム改革			
■ 国家試験支援体制の整備(専門スタッフの配置等)			
■ 文学部: 学修意欲(モチベーション)を引き出す教育改革			
■ 実学志向の課題解決型アクティブラーニングの導入			
■ 長期インターンシップの正課の教育課程化			
■ 企業人(地域との連携)の演習講義の導入			
■ 卒業生による講義の導入			
■ 個々の学生に合わせた多様なキャリア支援の実施			
■ 優秀な学生を伸ばす教育的戦略			
■ 優秀な学生向けの特別プログラムの導入(歯学部の取り組み成果を他学部へ波及)			
■ SA(スチューデント・アシスタント)、TA(ティーチング・アシスタント)制度の導入と活用			
■ 学位の質保証PDCAサイクルの構築			
■ カリキュラムポリシーに基づいたカリキュラムの検証と見直し			
■ シラバス記載内容の充実と整合性の検証			
■ 履修系統図・ナンバリングの体系的な見直し			
■ ポートフォリオの導入による学修成果の可視化			
■ アセスメントポリシーの策定と具体的な学修成果指標の設定および分析			
■ 授業評価制度の見直し			
■ IR機能の拡充と活動強化			
■ GPA制度による進級・卒業判定、退学勧告への活用			
■ 成績評価の平準化(ルーブリックの活用)			
■ 就職企業・卒業生追跡アンケートの実施(地域や職種分析も)			
■ 3. 学生支援の充実			
■ 中途退学理由の解明と対策の実施(集中的な退学者対策)			
■ 個人面談・オフィスパワーの活用			
■ 学生一人ひとりが安心できる拠り所の整備(教職連携支援体制の構築)			
■ 学生支援に関する包括的なポリシーの策定と専門スタッフの配置・育成			
■ 意欲ある学生の成長を促す奨学金制度の整備			
■ 努力を続ける学生に対する奨学金制度の拡充			
■ 学内ワークスタディの拡充等			

カテゴリ	成果	目標	計画
■ II. 研究			
■ 1. 学部の枠を超えた学際的研究環境の構築			
■ 研究意欲の喚起・推進			
■ 研究・教育業績と連動した研究費の配分の見直し(助教以上科研費申請なしで研究費減額)			
■ 教員の年次研究計画の作成と審査の実質化			
■ URAの配置など、科研費申請の推進指導、サポート体制の強化			
■ 附置研究所の活動方針明確化、サポート体制強化			



カテゴリ	成果	目標	計画
■ III. 医療			
■ 1. 社会変化に伴う医療ニーズの多様化・高度化を見据えた改革によって、地域の健康寿命の延伸に貢献する			
■ 患者動線に配慮した歯科診療の機能・配置等による利便性向上と診療効率化			
■ 病院内に地域連携室を設置し、地元の医療機関や歯科医師会と連携した地域医療ネットワークを構築			
■ 横浜市の中核病院である済生会横浜市東部病院や歯科医師会と連携し、周術期の口腔ケア機能を拡充			
■ 障がいを抱える患者様を対象とした、日帰りの全身麻酔下歯科治療の実施体制を強化			
■ 超高齢化社会における歯科総合病院の特徴を活かした質の高い訪問歯科診療体制を構築			
■ IV. 社会貢献			
■ 1. 地域(住民・行政)と總持寺、本学の3者が一体となった西口エリアの再開発(街づくり)			
■ 街づくり・地域活性化のためのコンソーシアムの形成と運営			
■ 地域(住民・行政)並びに總持寺と連携した事業やイベントの実施			
■ 2. 地域ニーズと学内資源(文学・健康医療・子育て支援・施設)のマッチング強化			
■ 保育科を生かした地域社会の子育て支援事業の拡充			
■ 地域開放型事業所内保育所の設置			
■ 病児保育所の開設			
■ 文学部・歯学部・短大部の知を活かした生涯学習の再構築			
■ 地域ニーズのリサーチと本学の特徴を活かした生涯学習の在り方を検討			
■ 学内教員を中心とした講座編成(インセンティブ付与)			
■ より体系的な学修への接続を検討			
■ V. 大学運営			
■ 1. 組織運営の高度化			
■ 効率的な組織づくりによるガバナンスの質向上			
■ 各種委員会やセンターの目的・目標の再確認(規程見直しと遵守)			
■ 外部評価委員などの多様なステークホルダーから意見を聴取する仕組みの構築			
■ 各種委員会やセンター・研究所等の規程・運用整理による権限明確化と手続きシンプル化			
■ 定期的なUD開催による将来像と中長期計画の全学的な議論・共有・浸透			
■ 学内情報共有の円滑化			
■ 大学運営協議会の設置・運用などによる他学部・他部署の教職員間の情報交換			
■ 広報活動・情報発信の戦略的な取り組み			
■ 広報部の設置による学内外の情報発信一元化			
■ HPで学内外に向けた積極的教員紹介			
■ 動画で教育研究の様子を公開(大学の魅力の見える化)			
■ 教員組織の質向上			
■ 教員の評価・処遇の公平性確保			
■ 職員組織の質向上			
■ 大学として求める職員像(資質・能力)の明確化			
■ 職員の人材育成方針の策定・運用			
■ 職員の評価・処遇の公平性確保(脱年功制)			
■ 組織再編と各部門における職務分掌の見直し・明確化			
■ 勤怠・出張・交通費等管理の効率化			
■ 2. 経営基盤の強化			
■ 収支バランスの回復に向けた財政運営			
■ 将来像に合わせた中長期財政計画の策定			
■ 費用対効果を意識した事業の精査・効率化			
■ 学内資源を有効利用するための既存業務見直し			
■ 3. 同窓会との連携強化			
■ 同窓会と連携した学生支援や大学運営			
■ 4. 機能的で心地よいキャンパスの再構築			
■ 地域や街の文化と融合したキャンパス景観づくり			
■ 禅をコンセプトにした統一感のあるキャンパス			
■ 仏教の魅力を伝える教育機能・文化施設の整備			
■ 若者が魅力を感じるオシャレなキャンパス作り			
■ 動線に配慮した利便性の高いキャンパス			
■ 学生の憩いの場(カフェ・ラウンジ・広場)がある居心地の良いキャンパス作り			
■ 誰もが安心して過ごせるバリアフリー化やセキュリティ強化			
■ 機器・設備の統一化・標準化による維持・管理の効率化			
■ 効果的な学修空間づくり			
■ アクティブラーニングを促すフレキシブルな学習環境整備			
■ 図書館などの利便性向上による利用率拡大			



景観の移ろい



大正11(1922)年
総持学園が誕生する直前の大本山總持寺と駅前の景観



令和6~(2024~)年 イメージ
総持学園は創立100周年を迎え、大本山總持寺の緑豊かな境内にキャンパスが広がる

Crane 翼プロジェクト

学びの心で世界を変える

鶴見大学附属 中学校・高等学校

附属 中学校・高等学校 将来構想

生徒に自分の「好き」をみつけさせ、 夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせる



校長 亀山仁

陽を浴びる朝、キャンパスに「おはよう!」の音が響きます。ホームベースに集って、黙念。そして読経。一日の生活に心を込めます。いかなる時流の響きが轟いても、鶴見の丘では温和な気風を守り継ぐ。改革・改善に向かって発揚する今、決して見失ってはならない重責を心に銘記します。

生徒諸君は穏やかで慎ましい。我が校の美風と誇るべきでしょう。しかしながら、彼らを見渡すと、時に案じます。謙遜が過ぎて、自力を見限っていないだろうか。私たちは、心が躍るような夢を子どもたちに授けているだろうか。改革を先導する身として自問を止みません。

「君たちみんなに、よき宝が授けられている。堂々と胸を張りなさい。そして、宝を磨きつづけなさい。将来、きっと輝くはず!」

私は、声を大にして伝えつづけた。学園生活のあらゆる機に広い世界を披露して、夢を育む種として「好き」(=好奇心)を与えたい。「僕はできる!」「私は輝く!」と爽快な笑顔で応じてほしい。目標を高く掲げ、謹厳に精神を保って日々精勤しよう。禅の教えに導かれる私学が投じるべきメッセージは、21世紀の今も不変です。

先行きが不透明な時代は希望が抱きにくい。しばしば、「不穏な時代に備えよ!」と脅してしまいます。私たちは、「安全」「無難」を求めて夢を遠ざけるような教導は排したい。対策教育は不本意です。

大人の目には「無邪気」でもよいではないか。中学・高校の時は、みずみずしい生命力がわき起こる絶頂期です。「好き」に始まり夢を描く。そして、未来に鮮やかに花開かせるために、皆が熱い志気を紡ぎながら挑みつづける光景を願います。

私は、数々の改革案の「数値目標」以前に、根源的な「状態目標」を求めます。

未来ビジョンを定めるにあたり、全校の教職員と密に議論を重ねました。子どもたちの成長に寄り添いたい。世界に逸材を輩出したい。教職に就いたのですから、皆の志は同じです。

目指すべき将来像

建学の精神を基盤にグローバル化した未来を生きる力を育て、社会から高く評価され、保護者から深く信頼される卓越した中学校・高等学校



教育ビジョン

自立の精神と心豊かな知性を育み
国際社会に貢献できる人間を育てる

教育目標宣言

「学びの心で世界を変える」



方針

生徒に自分の「好き」をみつけさせ、夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせる

施策の分野と目標

1. 中学校・高等学校としての個性の発信
2. 保護者に信頼される教育の実践
3. 総持学園の一員として生きがいの持てる
職場環境
4. 安定した経営基盤を持つ学校



学びの心で世界を変える

しばしば「生きる力」の定義として引用される文部科学省の答申^{注1}を再読しました。この答申が表明されてから20年以上の時を経ました。

私たちは、常に試行錯誤を重ねて、イノベーションに挑みつつも、今なお「生きる力」を育む指針として貴びます。初志としての禅の教えに合致するからです。

知識や技能より前に、学びの心を耕し、内なる心を開拓しつづける志を授けたい。私たちの誓いは、まさしく禅の精神そのものです。

目まぐるしく変転する世を嘆かず、危難に怯まず、自らを変えよう(=成長しよう)。そして、自ら勇み立って世界を変えよう(=創造しよう)。そう意気込む果敢なパイオニアを育てあげます。

「学びの心」とは何か。常に自らに問いかけて、改革・改善に励みます。「学びの心」の真義を一時も忘れずに、自身を磨きあげて、世界を色鮮やかに照らす英才を輩出します。



注1) 「我々はこれからの子供たちに必要となるのは、如何に社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性であると考えた。逞しく生きるための健康や体力が不可欠であることは言うまでもない。我々は、こうした資質や能力を、変化の激しいこれからの社会を「生きる力」と称することとし、これらをバランスよくはぐくんでいくことが重要であると考えた。」

【中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」という諮問に対する第1次答申(平成8年)】

21世紀型教育の基盤を確かめて

初代校長、中根環堂先生。曹洞宗の僧侶にして米国カリフォルニアで哲学を修めました。私たちは、太平洋を渡った先覚者の志を守り継ぎます。

国際教育は、長きにわたり太い幹。海外研修や長期留学を、ますます力づけるために、さまざまな構想を描きます。

「21世紀型教育」の実践そのものが目的ではありません。建学の哲学に適う「真人^{ひんと}」を育て上げる手段です。環堂先生が残した数々の金言は、そのまま、21世紀の心構えに合致します。「真人」とは、「主体的に社会に献身する人」です。

教科エリア+ホームベース型校舎の実り

2009年、待望の教科エリア+ホームベース型校舎が竣工。単なる「整備・美化」、「高機能化」とは一線を画する建築。すべての教科が専用の教室で学ぶ構造は、日本の学校設計の常識を打ち破りました。

禅の精神が支える中学校・高等学校は全国に数校のみ。さらに、徹底した教科エリア型は全国に希です。私立学校としてのアイデンティティーは、誰の眼にも色鮮やかです。唯一無二の学校として、「鶴見大附属だからこそ」なしえる教育ビジョンを描きます。

「学び」から入る、進路指導

「学びの心」を磨くために、上級の学府で学問を究めてほしいと願います。伸びつづける若いころに自力を限らず、高みを指さし奮励努力する日々にも価値を見いだします。学園の偉容を誇るために統計数値を積み上げる魂胆は皆無。入試問題研究と指導技術開発には全校をあげて尽力しますが、合格するためだけに策を講じる教導は排します。「学びの心」を胸中に満たせば、自ずと成果が伴うと信じます。

Vision実現に向けた改革計画概要

	～ 2019	～ 2024
教科指導	<ul style="list-style-type: none"> 3ステージ制再編 → 都度、点検・改善 教育課程（カリキュラム）の一部改訂 → 教育課程（カリキュラム）の全面改訂に向けた準備 シラバス再検討・再構築 → シラバス改訂 学習支援室の有効活用 各教科担当者チームの強化（非常勤講師との連携／学年・ステージチームとの連携強化） 習熟度別授業の実施 → 習熟度別授業の改善、向上（アドバンスクラスの設置） 理科教育振興のための設備拡充 → 理科教育の充実 鶴見大学連携強化（指導者・施設・教育資産） 英語4技能育成の調査・研究・実践 	
進路指導	<ul style="list-style-type: none"> 大学・入試問題研究体制整備（組織化・高機能化） 大学入試改革対応考察/指導計画立案・実践 	
ICT教育	<ul style="list-style-type: none"> タブレット端末活用 → 常時、有効活用研究 デジタル教材活用 	
21世紀型教育	<ul style="list-style-type: none"> 言語活動教育の機会拡大、アクティブ・ラーニングの実践（コミュニケーション力・プレゼンテーション力・文章力等） 海外語学研修機会拡大 短期留学制度の研究 → 短期留学制度の創設 → 交換留学制度の研究 海外交流校の充実 	
人間教育	<ul style="list-style-type: none"> 部活動支援 情操・マナー教育発展・ボランティア活動支援 教育相談機能強化 坐禅堂開放 	

学びの力を育むために

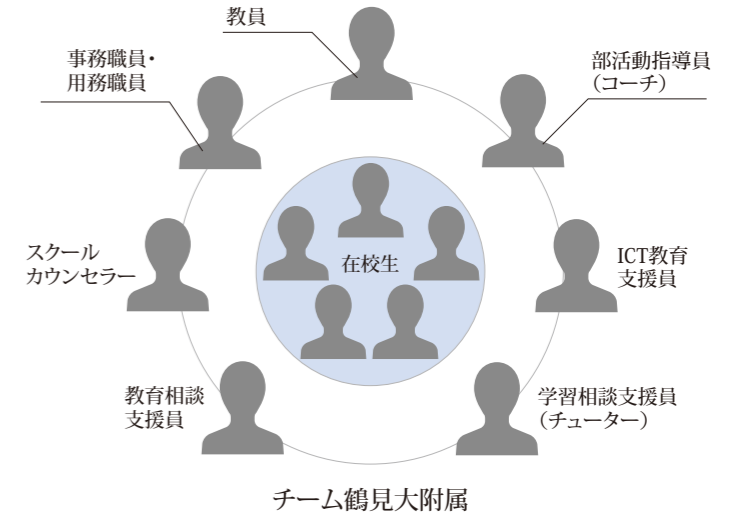
アクションプランによる改革促進

	教務部	学習進路指導部	生徒指導部	学校経営
共に生きる力	<ul style="list-style-type: none"> オーストラリア語学研修の充実 体験学習の整理 	<ul style="list-style-type: none"> 英語力の育成 スタディキャンプ実施 	<ul style="list-style-type: none"> 学校行事の充実 地域交流 スクールカウンセラーとの連携 	<ul style="list-style-type: none"> 学校評価、自己評価による学校経営の向上
探求する力	<ul style="list-style-type: none"> 教科メディアの充実 ICT教育の発展 修学旅行・体験学習の充実 	<ul style="list-style-type: none"> キャリアガイダンス 特活自由研究の充実 授業力向上研修 	<ul style="list-style-type: none"> 教科メディアの充実 	<ul style="list-style-type: none"> 階層別研修の充実 学校財政の安定化 リスクマネジメント体制の確立
挑戦する力	<ul style="list-style-type: none"> オーストラリア語学研修の充実 検定試験 ステージ制プログラム 	<ul style="list-style-type: none"> 外部模試の活用 特別講座の実施 キャンパス見学会の実施 	<ul style="list-style-type: none"> 部活動の充実 文化祭（光華祭）の充実 	<ul style="list-style-type: none"> チーム学校の体制づくり 施設・設備の整備 生徒募集の充実
基礎学力	<ul style="list-style-type: none"> 教育課程の編成 夏期講習の実施 	<ul style="list-style-type: none"> 公開授業、研究授業の充実 教科エリア型校舎での授業実践 目標達成に向けての現状把握 	<ul style="list-style-type: none"> 基本的な生活習慣の定着 	<ul style="list-style-type: none"> ガバナンスの強化 奨学金制度の充実 安全衛生管理体制の充実
人間力	<ul style="list-style-type: none"> ステージ行事の充実 宗教的情操の涵養 生徒基本情報のOA化 	<ul style="list-style-type: none"> キャリアガイダンス 卒業生の協力促進 	<ul style="list-style-type: none"> 朝礼・耐寒参禅会 ボランティア活動 マナー教育の充実 	<ul style="list-style-type: none"> 魅力ある職場づくり

組織運営理念

改革を成し遂げ、さらにその先の未来へ向かい永続的に進化を続けるためには、個々の教職員の技能を高め、強固な組織を築かなければならない。採用から研修制度にいたるまで、人事・教育計画を再考し、教育職員・事務職員に加えて、さまざまな分野のエキスパートとの協働によって子どもたちを見守り支えるチーム力を高める。

▼エキスパート例
 スクールカウンセラー・部活動指導員（コーチ）・ICT教育支援員・教育相談支援員・学習相談支援員（チューター）



プロジェクト理念

学びの心で世界を変える

禅の教えを礎に、教科エリア型校舎を最大限に活かし、21世紀の未来を創造する人材を輩出し、広く社会の信望を集める私立学校として発展する。

○現状の確認と計画の要点

学校概要			計画の要点
項目	2019年4月		
生徒数	1006名		1080名
教職員数	専任教諭 53名/常勤・非常勤講師 32名/ALT 2名 養護教諭 2名/司書教諭 1名/事務職員 10名		各種教育プログラムの実践やカリキュラムの改訂により、随時、適切な配置を検討する。
校地面積	34,652.57㎡	+獅子ヶ谷総合グラウンド 35,168㎡	
校舎	教科エリア	主要5教科教室 34室 実技教科教室 8室/CAI教室 2室	校舎設備の拡大・縮小は想定しない。経年劣化を防ぐため、各々の美化・整備は当然の責務とする。教材配置・学習機器拡充等、各教室の改善は教育手法の発展・進化に伴うものとする。→ICT環境と空調に関しては以下、別記。
	ホームベースエリア	34室	
	講堂棟	60周年記念講堂・図書館・視聴覚ホール	
	体育館棟	アリーナ・サブルーム(2)	

設備各論

項目	2019年4月	計画の要点	
生徒使用PC	72台(CAI教室に配備)	ハード・ソフトの進化により、適切に更新	
タブレット端末	生徒使用	60台	1人1台端末を検討する
	教員使用	90台	現状(全教員使用)を継続する
Wi-Fi	全教科教室・講堂棟・体育館を含む全館で完備	配線環境の高度化	
空調設備	校舎・講堂棟の屋内に完備	講堂棟の空調設備の更新	

校外研修・学内講習等

項目	2019年4月	計画の要点	
国際交流	1・2学年部	イングリッシュキャンプ	国際交流・語学に関わるプログラムを拡充 海外研修・留学制度を質/量ともに発展
	3学年部	オーストラリア海外語学研修修学旅行	
	3～5学年部	希望制海外語学研修	
国内研修	5学年部	広島・関西体験研修修学旅行	今後も「体験型プログラム」を重視
課外講座	4～6学年部	春期・夏期・冬期特別講座	対象学年拡大・講座数増加を検討
英会話力支援	3～5学年部	English Lounge	有効活用を期して、随時、改善



景観の移ろい



昭和30(1955)年
鶴見女子中学校・高等学校時代の景観



現在
鶴見大学附属中学校・高等学校の景観



安心の環境の中で、一人ひとりの子どもの
小さな発見や挑戦を大事に受け止め育む保有

鶴見大学短期大学部附属 三松幼稚園

附属三松幼稚園の将来構想

三松幼稚園は、1956年に幼稚園教員養成所（現 短大保育科）とともに設置され、以来60年以上にわたって地域の幼児教育の中心的役割を担ってきました。

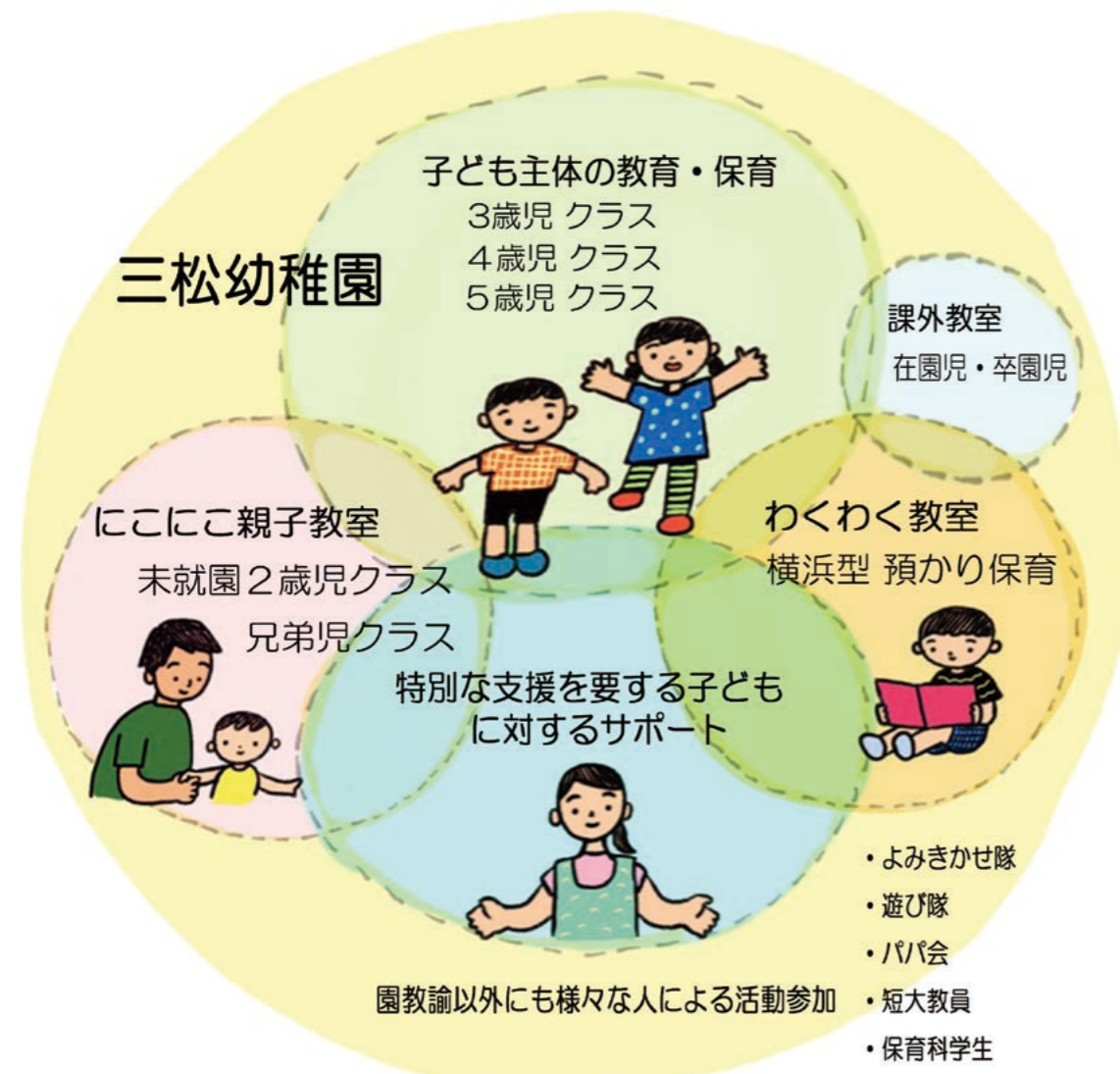
そんな幼稚園は、今、一大転換期を迎えています。

これまで、我が国では「母親が働いていなかったら幼稚園、共働きなら保育所」という考え方が一般的でしたが、核家族化や女性の社会進出の進展など、社会構造が変容する中で子どもを取り巻く環境は大きく変化し、子どもの教育・保育に対するニーズも、日を追う毎に多様化・複雑化しています。

そうした中、三松幼稚園ではこれまで培ってきた保育・幼児教育の伝統を受け継ぎつつ、新たな社会ニーズに応え、子どもにとっても保護者にとっても安心できる「地域の子育て拠点」となるべく、改革に取り組んでいます。



園長 鮫島良一



附属三松幼稚園の子どもをケアする教育体制

左記の図は、そのビジョンを簡潔に表現したものです。

「子ども主体の遊びを中心とした学びの保育」を核に、待機児童対策としての「預かり保育」、2歳児をはじめとした「未就園児保育」、「特別支援保育（インクルーシブ保育）」が相互にオーバーラップし、それぞれの役割を連続的に強化・補完し合うことで、子どもの成長を継ぎ目なく援助します。

また、様々な外部機関と連携して、体操や空手、読み書きやアートなど、身心の発達を促す課外教室の充実を図ります。

さらに、よみきかせ隊や遊び隊、パパ会など、保護者の方々にもそれぞれの興味や特技を生かして幼稚園運営に参画してもらうことで、保育者と保護者が一体となって温かく子どもたちを見守る環境づくりを目指します。

それに加え、附属園としての特性を生かし、短大保育科が有する専門的な知見や実践理論を、教員や実習学生たちと協力して積極的に取り入れていきます。

このように、従来の固定的な幼稚園の枠に捉われず、相互に重なり合う多様な活動とその関係者を包み込むことによって、一体的に子どもをケアする教育体制を構築し、地域の子育て拠点に相応しい幼稚園を目指します。

2017年3月には「幼稚園教育要領」が改訂され、幼児教育から高等教育までが一貫した理念（AI時代を生き抜くための主体的で創造的な人格の形成）に基づき統一されました。これからの教育は、「教える側が主体の教育」から「学ぶ側が主体の教育」へと転換され、「どのように学ぶか？」という、いわゆるアクティブラーニングが重視されます。

三松幼稚園では、幼稚園教育要領の改訂に先駆けて教育改革に取り組み、「子ども主体の遊びを中心とした学びの保育」の実践がようやく定着してきました。2019年度は、日本保育学会大会で関東地区を代表して公開保育を行うモデル園に選出されるなど、その評価も高まっています。

こうした改革は、内部の教職員だけでは実現不可能です。これからも、多様な機関と連携し、保護者や地域の方々々と手を携えながら、子どもたちの主体的な学びによる成長を見守っていきたくと考えます。

総持学園 略年表

- | | | |
|------|------|--|
| 大正13 | 1924 | 光華女学校
(現 鶴見大学附属中学・高等学校)を設立 |
| 14 | 1925 | 鶴見高等女学校
(現 鶴見大学附属中学・高等学校)を設立 |
| 昭和12 | 1937 | 光華女学校を鶴見第一女学校に名称変更 |
| 22 | 1947 | 六・三・三制実施に伴い新制鶴見女子中学校を設置 |
| 23 | 1948 | 鶴見第一女学校、鶴見高等女学校を合併統合し、
新制鶴見女子高等学校を設置 |
| 28 | 1953 | 鶴見女子短期大学
(現 鶴見大学短期大学部)を設置

短大に国文科を開設 |
| 31 | 1956 | 短大に幼稚園教員養成所及び三松幼稚園を開設 |
| 37 | 1962 | 短大に保育科、保健科(現 歯科衛生科)を開設 |
| 38 | 1963 | 鶴見女子大学(現 鶴見大学)を設置

大学に文学部日本文学科、英米文学科
(現 英語英米文学科)を開設 |
| 45 | 1970 | 大学に歯学部歯学科を開設

大学に歯学部附属病院設置 |
| 48 | 1973 | 鶴見女子大学を鶴見大学に名称変更し、男女共学化 |
| 平成 7 | 1995 | 大学に仏教文化研究所を開設 |
| 10 | 1998 | 大学に文学部文化財学科を開設 |
| 11 | 1999 | 鶴見大学女子短期大学部を鶴見大学短期大学部に
名称変更し、男女共学化 |
| 16 | 2004 | 大学に文学部ドキュメンテーション学科を開設 |
| 20 | 2008 | 短大の国文科を廃止

鶴見大学附属中学校・高等学校に名称変更し、
男女共学化 |
| 23 | 2011 | 大学に先制医療研究センターを開設 |



曹洞宗大本山總持寺並びにキャンパス全景 (昭和30年代)



鶴見女子短期大学校舎(昭和30年代)



中学・高校入学式 正面玄関 (昭和42年)

鶴見大学記念館
(平成16年竣工)



総持学園 Vision 2024 (2019~2024)



鶴見大学・鶴見大学短期大学部
神奈川県横浜市鶴見区鶴見2-1-3
<https://www.tsurumi-u.ac.jp>



鶴見大学附属 中学校・高等学校
神奈川県横浜市鶴見区鶴見2-2-1
<https://tsurumi-fuzoku.ed.jp>



鶴見大学短期大学部附属 三松幼稚園
神奈川県横浜市鶴見区鶴見2-1-3
<http://ccs.tsurumi-u.ac.jp/kindergarten/index.html>

我逢人

がほうじん

「まのあたり先師を見るこれ人に逢ふなり」(正法眼蔵行持)
心と心の出逢い、物と物との出逢い・・・出逢いこそ命